

資料館だより

企画・編集 国立ハンセン病資料館

発行 公益財団法人
日本科学技術振興財団

〒189-0002 東京都東村山市青葉町4-1-13

電話 042-396-2909

FAX 042-396-2981

URL <http://www.hansen-dis.jp>

資料館等運営企画検討会 収蔵庫の必要性を再確認

5月27日(火) 第10回ハンセン病資料館等運営企画検討会が、厚生労働省にて開催された。田原疾病対策課長の挨拶の後、本会構成員であり、5月に亡くなった故神美知宏・弐雄二両氏に黙祷を捧げて、議事に入った。

議題は、平成25年度事業実施状況及び平成26年度事業計画である。資料館の平成26年度の重点事業は、企画展・特別展の開催、各園資料調査事業の継続(厚生労働省から委託)、収蔵庫(収蔵資料)の整理、

新収蔵庫建設準備(平成27年度調査費獲得にむけて)、社会啓発事業の拡充(入館者増加及び外部啓発のための努力、組織整備とも関連)の5点である。

今年の検討会も厳しい意見を頂戴することはなかった。ただ新収蔵庫の準備状況についての質問(鮎川構成員)、その必要性を強調する意見(佐川・半田構成員)が相次いだことを重く受け止めたい。平成25年度ハンセン病問題対策協議会における確認事項3(5)にお

運営企画検討会



いて「専門家の助言を受けつつ、必要な予算について平成26年度予算で確保できるように努力する」と明文化されたものの、実作業が進捗していない現実があるからである。資料館としても新収蔵庫の建設にむけての努力を、疾病対策課との協議を進めながら継続する心算である。そのほか海外からのアクセスに比べ、同時に資料館の意義を海外に発信すべきという意見(山口・横田構成員)、啓発事業の拡充を評価する立場か

春季企画展・不自由者棟の暮らし

—ハンセン病療養所の現在—

ら、各県の指導主事が集まる文科省の全国会議において、資料館の教育事業を情報提供したらどうかという意見(増田構成員)等を頂いた。国際化対応は直ちにはないが、中長期の課題としたし、文科省へのアプローチについては啓発事業の拡充の中でその可能性を探ってゆきたい。

7月27日まで「不自由者棟の暮らし—ハンセン病療養所の現在—」展を開催している。

展示室では多磨全生園盲人会会長の坂井定治さんの生活の各場面を撮った映像をじっくり見ている人が多い。外出には介助が必要なもの、食事や室内の移動は自分でする。不自由を抱えながらも自立を求める坂井さんのその力強さに共感している人が少なくないのだろう。

6月21日(土)には本展の付帯事業として、山内和雄沖縄愛楽園園長をお招きし講演会「沖縄愛楽園の不自由者棟」を開催した。生活の場である不自由者棟に、簡単な医療処置が行える観察室を設け、ユニットケアを導入するなど、終末期を見据えて入所者を支援する



講演会「沖縄愛楽園の不自由者棟」

同園の先進的な不自由者棟運営を学ぶ機会となった。講演は不自由者棟での入所者の暮らしの様子、ライフサポートチームの活動が主な内容であった。ライフサポートチームは、入所者の生活を充実させることや意見交換、終末期に際してどのような医療処置を受けたいかという意思表明まで、様々な側面から入所者を支援するという。この中では職員と入所者の関わりについての話がかった。山内園長は月に一度は入所者を訪ねてコミュニケーションを取り、職員に対して入所者の部屋を訪問し個々人が何を望んでいるかを聞き出すよう指導しているという。職員と入所者の緊密な関わりがあるからこそ、先進的な不自由者棟運営が実現していることを知った。質疑応答では看護・介護関係者からも質問が出、内容の充実した講演会となった。

ハンセン病問題対策協議会 社会復帰、在園保障、将来構想等検討

6月20日(金)午後2時から都道府県会館で、平成26年度ハンセン病問題対策協議会が開催された。これは厚生労働副大臣が座長を務め、全原協・全療協・全国退所者連絡会・弁護団からなる統一交渉団と厚生労働省とが、年に一度協議を行う場である。

協議事項は例年、1. 謝罪・名誉回復について 2. 社会復帰・社会内生活支援 3. 在園保障 4. 真相究明 5. 将来構想の5つに大別され、その年ごとに解決すべき課題が取り上げられている。当館に関する事項は4. 真相究明に含まれ、たびたび協議されてきた。

今年度は、当館に直接関わる議題はなかったものの、①各園に残る歴史的建造物・史跡・療養所施設等の保存について、各園の意向を踏まえ、遅くとも3年後の計画立案完了。②開館した重監房資料館への進入道路の舗装と、重監房跡地保全のための工事を早急に行うこと。③本年度開館する沖縄愛楽園の社会交流会館への学芸員配置。以上の要求があった。



ハンセン病問題対策協議会

愛楽園支部長が、開設準備をボランティアに負わせてしまっている現状を説明し、学芸員複数名の配置を要望した。また中尾伸治長島愛生園支部長は、長島愛生園歴史館と菊池恵楓園社会交流会館にももう1人ずつ学芸員を配置してもらいたいと述べた。これらの発言に対して田原疾病対策課長は、学芸員の必要性はわかっているののでできるだけ配置できるよう作業部会で検討すると回答した。

なお、昨年度は議題にあがっていた当館収蔵庫の増設は、残念ながら今年は議題に含まれなかった。しかし会議の最後に、佐川修全療協会長代行が収蔵庫増設の必要性について発言した。土屋副大臣は、その話はさきにかがっており、必要性は認識しているので検討すると応答した。

ところで会議中、当館には国から運営費が出て、各園が設置している資料館に出ないのは差別だとの発言があった。また当館の裁量で予算を各園資料館に融通できるかのような発言もあった。実際は、当館は疾病対策課管轄の社会啓発

らい予防法による被害者の名誉回復及び追悼式典

6月20日(金)、午前11時から厚生省正面人口脇に設置された追悼の碑の前で、「らい予防法による被害者の名誉回復及び追悼の日」の式典が催された。当館からは成田稔館長が参列した。この式典は平成20年度ハンセン病問題対策協議会における確認事項に基づき、ハンセン病を正しく知る週間に代わり毎年開催されている。

式典ではまず、全国の療養所の納骨堂に眠る一六、三〇九柱の死没者と、5月初めに相次いで亡くなられた神美知宏全療協前会長と笹雄二全原協前会長に対して黙祷を捧げた。その後、田村憲久厚生労働大臣式辞、安倍晋三内閣総理大臣挨拶(代読)、谷垣禎一法務大臣挨拶、伊吹文明衆議院議長メッセージ披露、山崎正昭参議院議長メッセージ披露があり、続いて土屋品子厚労副大臣、全原協、全療協、全国退所者連絡会、遺族代表、国会議員、全国知事会代表らが献花を行った。

さらに来賓として、中曽根弘

費による運営、各園資料館は各園の運営費や自治会費による運営である。予算の仕組み上、現状のままで予算の融通は不可能であることを付記しておきたい。

文ハンセン病対策議員懇談会会長、平沼赳夫ハンセン病問題の最終解決を進める国会議員懇談会会長、志村康全原協新会長、佐川修全療協会長代行の挨拶があった。また今年はファン・ガンナム氏が遺族代表として体験談を語った。

挨拶の中で志村会長は、菊池事件などハンセン病にまつわる人権侵害の例をいくつか示し、患者・回復者とその家族が被った被害の実態は闇に閉ざされていると述べた。



追悼式典

た。そしてハンセン病問題基本法に規定されている療養生活・社会生活・名誉回復の実現のため、十分な措置を講じるよう国に求めた。佐川会長代行は、ここ数年來の大きな課題であるハンセン病療養所職員の定数削減問題は、複数の身体障害を負っている入所者の生活に大きな影響を与えている。亡くなった神・笹両会長は昨年のこの式典で、阻止するために実力行使も辞さないと表明したが、それは私たちの意志だ。最後まで戦うと決意を語った。

写真展「てっちゃん」

去る5月31日から6月29日まで、当館1階ギャラリーにおいて写真展「てっちゃん」が同名の写真集(彩流社)出版に合わせて開催された(主催・彩流社)。韓国出身の写真家である権哲(グオン・ Chol)さんが長年栗生楽園入所者の故桜井哲夫さんの元を訪れ、撮影したものである。

桜井さんは、「てっちゃん」の愛称で親しまれていた。その姿は重度の後遺症や数多くの苦難の中でも生き生きとし、明るく、笑顔はまぶしい。権さんは桜井さんが詩作に出会い、どのような状態であっても自分らしく生きようとしたその時どきを捉えようとした。「てっちゃん」の詩と写真に強く引きつけられたという感想が寄せられ、盛況の中、幕を閉じた。

いのちの証を見極めるをテーマに 草津で第10回ハンセン病市民学会

二〇一四年5月10日・11日、群馬県草津町において、第10回ハンセン病市民学会総会・交流集会在開催された。今回の全体統一テーマは「いのちの証を見極める」。

9日には市民学会参加のために草津町を訪れていた神美知宏氏（全療協会長）が、11日には笹雄二氏（国賠訴訟全国原告団協議会会長）が亡くなった。入所者運動をけん引してきたリーダーを相次いで失うという、大きな悲しみに包まれながらの交流集会となった。10日は草津音楽の森コンサートホールにて、総会と交流集会在行

われた。交流集会第一部のテーマは「重監房資料館の新設の意味を考える」。4月30日に栗生栗泉園隣りに開館した「重監房資料館」をめぐる、討論が行われた。ハンセン病資料館からは、栗泉園在園時代に重監房収監者に食事を運搬していた経験をもつ、語り部の佐川修氏と、重監房跡の発掘調査を担当した黒尾学芸課長が登壇した。佐川氏は、重監房を舞台として行われた人権侵害の実態を証言し、「アウシュビッツのような施設が日本にもあったことを知ってもらいたい」と結んだ。

なお重監房に関しては、交流集会の期間中、「重監房資料館・重監房跡フィールドワーク」が4回にわたって行われた。フィールドワークには大勢の参加者が集まり、重監房と重監房資料館への関心の高さがうかがえた。

交流集会第2部は、「納骨堂を残すことはなぜ大切なのか」をテーマに行われ、訓覇浩氏（ハンセン病市民学会共同代表）、徳田靖之氏（国賠訴訟西日本弁護士団）、森川恭剛氏（琉球大学）らが登壇し、討論を行った。

11日午前は、それぞれ会場を異にして、4つの分科会が

行われた。各分科会のテーマは、分科会Aが「療養所の入所者の人権が守られるための制度を提案する」、分科会Bが「ハンセン病患者の証言集をまとめる必要性を考える」、分科会Cが「ハンセン病文学と読書会の可能性」、分科会Dが「無らい県運動研究会成果報告」である。

午後は栗生栗泉園中央会館にて、「琵琶で弾き語る笹雄二作品 死ぬふりだけでやめとけや」が、薩摩琵琶奏者の後藤幸浩氏と水島結子氏によって行われた。この催しは、11日に笹氏が亡くなったことをうけ、急きょ「笹さんへの追悼コンサート」に変更された。

草津に重監房資料館オープン

開館記念式典開催される

重監房は、栗生栗泉園にあった患者の懲罰のための監禁施設である。その存在と歴史を後世に伝え、ハンセン病をめぐる差別と偏見を解消するために厚生労働省が設置した重監房資料館の開館記念式典が、4月30日（水）に雨の中挙行された。

式典当日は同館の駐車場に設営されたテントに来賓、報道陣など約二百人が集まった。午後1時30分、司会による開会の辞に続き、厚生労働省より土屋品子厚生労働副大臣が、同館運営委員会より委員長の黒岩信忠草津町長が主催者挨拶を行った。続いて来賓として、江田五月参議院議員、小淵優子衆議院議員、羽生田俊参議院議員、笹川博義衆議院議員、大澤正明群馬県知事、佐川修全療協会長代行、藤田三四郎栗生栗泉園入所者自治会長、笹雄二全療協会長、成田稔国立ハンセン病資料館館長が登壇した。重監房資料館設立を牽引してきた笹氏は病棟からストレッチャーで会場に入り、挨拶こそ叶わなかったものの、参集者の拍手を浴びた。

式典後、同館玄関前で土屋氏、黒岩氏、佐川氏、藤田氏によるテープカットが行われ、その後参集者が展示室を観覧した。第1展示室では重監房の一部の実寸再現と再現映像、および重監房全体の20分の1縮尺模型と、監禁された人々についてのパネルを展示している。第2展示室ではハンセン病政策と重監房の歴史に関する解説パネルや、昨年重監房跡地で行われた発掘調査で出土した遺物等の実物資料を展示しており、重監房にまつわる証言映像を見ることが出来る。

内覧会に参加した人々は、北原誠重監房資料館学芸員、黒尾和久国立ハンセン病資料館学芸課長らによる展示解説を受けながら、改めて重監房のすさまじい状況を示す資料に見入っていた。

同館は5月1日から一般にも公開されている。

全療協会代表者会議

6月19日12時30分より15時まで愛宕山の弁護士ビルで、全療協の支部代表者会議が開催されました。議題は①本部機構について②当面の運動のすめ方についてですが、各支部代表は機構を縮小してでも組織を維持すべきだ。神会長は遺志を引き継ぎ可能な限りの運動をつづけることが、人間の尊厳回復、偏見・差別の解消につながることを確認したということです。しかし役員選出が困難な状況も考慮して、会長は非常勤にする等、事務局業務の点検、運動のすめ方をはかるため、7月1日、本部機構検討委員会を開催することになったとのことです。



佐川修全療協会長代りの挨拶

神さん弔さんを偲ぶ会 弔辞、思い出、誓い、様々な語りかけ



神さん弔さんを偲ぶ会

6月21日(土)、5月に相次いで逝去された「全療協 神美知宏会長・全原協 神雄二会長を偲ぶ会」が、T O C有明にて行われた。

偲ぶ会は、在りし日のお二人の姿を紹介するビデオ上映で始まり、久保井根弁護士の進行で、多くの方が次々と遺影の前に歩み出て、ある人は弔辞を読み、ある人は会場へ呼びかけ、ある人は詩を朗読する等、スタイル様々に、故人との交誼を振り返り、残された課題を確認、お二人の遺志を引き継ぐべく「誓い

の言葉」を述べた。

故人に語りかけた方は、江田五月参議院議員、平沼超夫衆議院議員、佐川修全療協会会長代行、堅山勲全原協事務局長、高中正彦東京弁護士会会長、小池晃参議院議員、津島雄三元衆議院議員、渡部尚全原協事務局長、新川久三福岡県築上町長、徳田靖之弁護士、鮎京真知子弁護士、藤田三四郎栗生楽泉園自治会長、藤田邦雄施設長協議会会長(朝戸裕多磨全生園長代読)、岸田重信全医労委員長、谷崎和男「らい予防法」被害者の社会復帰を進めるホームステイセンター柿の木世話人代表藤田信宏氏(俳優・弔さんの詩朗読)、姜信子氏(作家・弔さんの最後の著作紹介)、藤崎陸全療協事務局長(神さんの遺した言葉「緊急アピール」読み上げ)である。じつに錚々たる顔ぶれといえよう。

最後に神さんの遺族を代表して奥様と義弟の森和男さん、弔さんの「家族」として吉幸かおるさんからお礼の挨拶があり、参加者による献花が行われ、予定時間を超過して偲ぶ会は終了した。

会場を後にして、改めて二人を亡くした喪失感、寂寥感を覚えた。しかし、私たちは故人の遺志を引き継ぎ、「誓いの言葉」を実践することでは、ぽっかりと空いた胸の穴を埋めることはできないだろう。各々の持ち場での戦いをこの刹那にも継続するしかない。

中曽根、平沼両議員懇談会に 全療協、全原協が要請書提出

6月19日(木)参議院議員会館で、ハンセン病対策議員懇談会総会が開催された。超党派の国会議員からなる2つの議員懇談会が合同で開いた会合である。会場には他に、全療協、全原協、全国退所者連絡会、弁護団等が集まった。

まず初めに中曽根弘文・平沼超夫両議懇会長が挨拶し、国家公務員の次期定員合理化計画に関する閣議決定を問近に控え、対処の仕方と活動の方向について検討しよう」と提案した。

続いて統一交渉団からの要請書を、佐川修全療協会会長代行と志村康全原協会会長が中曽根・平沼両会長に手渡し、志村会長、佐川会長代行、徳田・小林両弁護士、手嶋全国退所者連絡会代表が説明を行った。要請書の内容は次の2点



両議員懇談会総会

である。①定員削減の閣議決定から療養所職員を除外、もしくはそれと等しい措置を講じること。関連して、安倍晋三総理大臣と直接面談する機会を設けること。②退所者給与金・非入所者給与金受給者が亡くなった場合、その遺族への承継を可能にすること。

これを受けて、厚労省疾病対策

土屋厚労副大臣来訪 全生園・資料館を見学

6月16日(月)、土屋品子厚生労働副大臣が多磨全生園と資料館を訪れ、視察を行った。全療協および自治会との懇談、施設の視察、納骨堂献花などのち、副大臣は15時半に資料館に到着した。その後、当館語り部の平沢保治さん、黒尾学芸課長の案内で、およそ30分かけて展示を見学された。開催中の企画展「不自由者棟の暮らし」も見学された。

黒尾学芸課長は、資料館の成り立ちや目的、日本のハンセン病対策の歴史などについて、平沢さんはかつての雑居部屋、患者作業、重監房などについて説明を行った。そのなかで、平沢さんが資料館設立にかかわった当事者の立場から、「我々は国や社会に苦しめられた恨みから資料館をつくったのではない。二度と同じ過ちが繰り返されないよう活動している」と述べ



平沢さんの説明を聞く土屋副大臣

課、国立病院課が現状について報告した。続けて各国会議員から決意表明や提案など発言があり、厚労省両課や内閣府人事課に対する質問も出された。江田五月顧問からは、厚労大臣は被害の回復が必要と考えて最近2年間の定員削減を止めたのだから、担当省庁にも間違いの無い対応をしてもらいたいとの発言があった。

最期に金子恭之事務局長から、両議懇として要請書の実現を図っていくという総括がなされた。

平沢さんは最後に、資料館が国内外からの期待に応えていくためには、資料館の運営態勢の強化が必要であることを副大臣に訴えた。二人は固い握手を交わし、副大臣は資料館をあとにした。